

川崎の歴史 Vol.2

川崎宿を訪れた幕末の志士たち



(歌川広重「東海道五拾三次之内川崎」 所蔵：東京富士美術館)

【維新前夜―尊王攘夷運動の背景―】

幕末の動乱は嘉永6年（1853）のペリー来航によって始まる。アメリカ使節の上陸は200年以上にわたって欧米諸国との交流を制限していた日本の近世社会を崩す事態であり、後に「志士」と称される武士たちに「墨使膺懲」（ペリー暗殺）を志向させるなど後の攘夷運動の起点となった。例えば、吉田松陰はその典型である。しかし、日米和親条約が締結されたことで日米開戦の可能性は消滅し、奮い立っていた一部の武士たちは沈静化した。攘夷運動が本格的に始動する画期が安政5年（1858）の修好通商条約（安政の五ヶ国条約）の締結である。天皇の「勅許」（許し）がない中で幕府がアメリカ・イギリス・オランダ・ロシア・フランスとの通商条約を結んだ。ここに天皇を尊び、欧米諸国の強圧的要求を斥けようとする「尊王攘夷運動」が活発になっていく。

【川崎宿を訪れた若き日の木戸孝允】

幕末の川崎宿には様々な人物が訪れていることが史料から確認できる。今回はその事例を紹介する。安政5年（1858）、この年は井伊直弼の大老就任、通商条約調印や將軍継嗣問題をめぐる対立と弾圧、など幕末の動乱が混迷を極めていく画期である。後に明治維新を主導していく木戸孝允（桂小五郎）は、安政5年当時には長州を離れて江戸を中心に修業の身であった。この時、数え年26歳である。6月4日来島又兵衛宛て木戸孝允書簡には次のように記されている。

「一日には一同與四郎同道致し大森に而丁打を一見仕、羽田弁天にて中喰相認、其より直に舟にて彼の内山艦江罷越候処、折能雅輔も罷越居彼是都合宜敷一同熟見仕候、左候而上陸仕、大師江参詣致し直に川崎江罷越万年屋にて避暑仕、與四郎翁に相別れ申候」（『木戸孝允文書 第一』40～41頁）

書簡によると6月1日に木戸は同じ長州藩士の井上與四郎・山田雅輔などと共に川崎大師を参詣し、川崎

宿万年屋を訪れている。六郷の渡しから川崎宿に入ると万年屋をはじめとした旅籠・茶屋があった。すでにこの頃の木戸は政治への関心を抱き、この年8月には初めて仕官することになる。幕末政局にとっても、木戸自身の人生にとっても重要な時期である。このように幕末の川崎宿を若き日の木戸孝允が訪ねていることが史料から裏付けられる。川崎の歴史を考えていくうえでも貴重な一齣と言える。



木戸孝允（桂小五郎）

（田中萬逸編『画譜 憲政五十年史』国政協会、昭和15年 国立国会図書館「近代日本人の肖像」）

【川崎宿における高杉晋作・久坂玄瑞・坂本龍馬の会談】

文久2年（1862）は「尊王攘夷運動」の隆盛期である。日本が如何にして欧米諸国と対峙していくのか、その手法をめぐって壮絶な葛藤が生じていた。そんな中、川崎宿にて会談内容は不明ながらも重要な顔合わせが行われていることが史料から判明する。

文久2年（1862）11月12日、長州藩士久坂玄瑞の日記「筆廼末仁満爾」には次のように記されている。

「暢夫同行、勅使館に往、武市を訪、龍馬と万年屋一酌、品川に帰る。」（『久坂玄瑞全集』311頁）

「暢夫」は高杉晋作、「武市」は武市瑞山（半平太）、「龍馬」は坂本龍馬のことである。この日、久坂は高杉と共に「勅使館」（勅使三条実美らの宿舎。攘夷断行を幕府に促すために江戸に来ていた）にて勅使の護衛をしていた武市を訪ね、それから坂本と川崎宿万年屋にて飲み会をしていたという。坂本はこの年の3月に久坂の言説に影響されて土佐藩を脱藩している。久坂・高杉はこの後に品川御殿山イギリス公使館焼き打ち事件などを起こす。

川崎宿万年屋での高杉・久坂・坂本の会談は川崎から幕末史の一齣を考える貴重な事例である。



坂本龍馬

（出典：「近世名士写真 其2」近世名士写真頒布会、昭和10年 国立国会図書館「近代日本人の肖像」）